

# もの・まち

県庁を活用したまちづくり

ケービーケー久保田  
一級建築士事務所代表

久保田 要氏

地域に根差した行動を多岐にわたって展開する、甲府市のケービーケー久保田一級建築士事務所の久保田要氏。



「建築という行為は、まちの秩序をつくること」と語る。その際、大切にしなければならぬのが、その場のもっているポテンシャルを、見せながらいかに引き上げるか。言い換えると、「場や地域、先人たちの遺産、歴史的な文脈と向き合い、的確に把握、理解する。その上で、現代の資産としていかに活用できるかを考える。それが建築、設計監理の本質だ」と言う。さらに、「地域の人のびとや職人集団（施工者）がその過程に参加する。そのことで、みんなが場に向き合うことになる。それがまちづくり」とも。

また、「そもそもアーバンデザインの原点は、生き様を遺すこと、つまり保存再生すること」とし、「A級の建築、文化財は自然に残る。ポイントは、B級をどれだけ残してまちづくりを展開できるか」と指摘する。

## 都市デザインの原点は保存再生

その成果の一つが、再生・保存してA級となった登録有形文化財（2003年登録）の「桃園・村松家」（南アルプス市）だ。江戸時代から続く村松家は、何代にもわたって手を入れられ、増改築を繰り返してきた。その場所や住宅と向き合ってみて、「重層化された村松家の先祖の記憶や履歴が、その時代の時代における時代性や環境を創り、育んできた。その積み重ねの結果として、現代の暮らしが営まれている」と喝破。

そして、「空間遺産」として遺されている建築空間を大切に使い込み、保護していくことは遺伝子も持っている先見能力を残すことであり、遺伝子は、後世の迷いに解を与えてくれる」と語る。

活性化が求められている甲府駅南口の商店街についても、山梨県庁舎を活用したまちづくりを提案する。まもなく1世紀を生き抜くことになるモダンイズム建築の「山梨県議会議事堂」「県庁舎旧本館」「県庁第一南別館」「甲府市庁舎南庁舎」「法人会館」を生かして再生しようというプランだ。「単に大規模商業施設をもってきて短期間のキャンペーンで終わるようでは意味がない」

## 100年、200年先見据えた地域経営

1970年まで山梨県立図書館として利用されていた第一南別館は、30年に竣工。山梨県出身の実業家・根津嘉一郎の寄付で建てられた昭和初期の分離派モダンイズム（ル・コルビュジエも影響を受けたオランダのディ・ステイル派の流れを日本に導いた）建築だ。「貴重な歴史的文化的遺産を文化“資産”とし、100年、200年先を見据えたまちづくり（地域経営）をする。さらに、その活動をベースにして、次へと展開していく。そのことで、行政は価値を高めることにもなる」と語る。

この9月5日には、つなぐNPOまちミュー友の会（山本育夫理事長）が企画運営する見学会「甲府中心街のたてものを、あれやこれや17ほど、訪ねるウォーキング」でガイドを務めた。山本理事長は、「このNPO（非営利組織）ではまちを歩くウォーキングツアーをやっている。久保田さんはまちを歩く建築家。信念もお持ちで、建築やまちづくりに対する考え方を教わ

っている」と信頼を寄せる。

日本建築士会連合会企画情報委員として青年委員会とともに「非営利組織である建築士会が社会的認知を受けるためのフレームづくり」を提案した久保田氏。連合会の地域貢献活動推進センター設立に大きな役割を果たした一人でもある。



UIAベルリン大会でパネル展示した「桃園・村松家」

（連載「建築士の地域貢献活動」は今回で終了します。加筆の上、再編集し冊子として刊行します）